

活力ある美しい まち／田園／農村の マネイジメント



北海道大学大学院工学研究科教授
臨床都市計画家

小林 英嗣

1 20世紀初期の計画と意志

21世紀の人間の生活は、極度に人工化され肥大化した都市文明に対し、農村や自然的な環境との関連の中でどのように変質しながら展開してゆけばよいのでしょうか？

近代社会に移行しつつある20世紀の初頭、多くの矛盾を解決するために近代建築と近代都市計画が誕生しました。19世紀末、産業革命が展開した多くの都市からは緑が失われ、雨が降ると道はぬかるみで衛生状態も悪く伝染病もまん延しました。このような劣悪な生活環境から人々を救う使命感から生まれたのが近代建築と近代都市計画の思想です。

イギリスでガーデンシティを提唱したハワードは、「いかにして、人々を土地に戻すか。天空を持ち、そよ風が吹き、太陽が温め、雨露が湿りけを与える我々の美しい土地、それは人類に対する神の愛の具体的あらわれそのものである」と述べ、イギリスのカントリーサイドにある猟用の広い庭、スマイルの香りの漂う森、新鮮な空気、サラサラ流れる小川の美しさを評価し、田園の豊かさを都市の人間が享受し、維持する方法を模索した結果、「都市と農村は結婚しなければならない」というガーデンシティの概念に結晶させました。

ふり返ると、20世紀初頭の近代建築と近代都市

計画の理念と原理は、人間を守り、地域共同体を育むという素朴なヒューマニズムをもとに主張されたものでした。

2 ラーバン・エリアのワイズユース

20世紀、文明と技術によって人工世界に象徴される近代都市が世界のあらゆるところに生まれました。肥大化したと言っても過言ではない都市文明に対し、21世紀の人間の生活と都市は、自然的環境そして農業との関連でどのように方向を変えつつ再生されるべきなのでしょう。

かつて、都市とはその内部に文明と文化が保証されるべきはずのものでありました。近代的な生活と社会を支えてきた都市文明（アーバニズム）は、本来的には自然的エリアを含んだより広域の循環型社会を前提とした生産と生活の姿を描きながら都市的な生活の矛盾を解決しようとした、地域空間の秩序化の運動です。世界の近世のエコ・シティを代表する江戸や城下町、そして近代都市の理念と原型を範として20世紀初頭の英国のガーデンシティの豊かさを思い出していただきたい。しかし、戦後のわが国の都市外での自然的環境の変貌を冷静に見直すと、郊外ニュータウンやリゾート地、そして住宅地が飛散したような別荘地などを無秩序に生み出し、都市の矛盾を拡大することに帰結してしまいました。

しかし今、九州や北海道などの地方都市の動向を改めて冷静に眺めてみると、社会資本の充実、個人のクオリティ・オブ・ライフ（人生の質）の変化と向上、ネットワーク社会への移行などが相まって、これまでの「都市」と「農村」の関係が急激に変化する大きなうねりを実感します。しかし同時に、「都市」（アーバン）と「農村」（ルーラル）が共生する新しいライフスタイルが生まれつつある地域（ラーバン・エリア）を冷静に見透かす地域の眼力が大切です。多自然居住や優良田園居住、あるいはSOHO（スモール・オフィス、ホーム・オフィス）などの目新しいコンセプトの計画の大部分が実は単なる郊外への冗長な拡大と田園地域や亜自然地域への都市からの攻撃的進出であり、まるでキャンピングカーや4WDなどの「擬似自然派」が山野河海や農村を傍若無人に侵略してごみを撒き散らし、わだちを刻み込んでゆく姿と同じだからです。

現状のラーバン・エリアへの一般的な認識は、都市と農村の狭間に存在する、混乱しきった、そ

して矛盾に満ちたエリアと見られがちです。しかし世界的な視野で見ると、北海道のラーバン・エリアの理想的な環境と生活を創出しうるポテンシャル（人材・資源環境）と可能性に気づきます。

3 生成りのコンパクトシティ、スロータウン

私たち日本人は土地を大切に、樹木や作物を丁寧に育て協働で管理し、第二の自然を見事につくり上げました。幕末の開港時にケンペルなど多くの欧米の有識者は、日本の農村を見て感動しています。見事に人間の手が入った精巧な里山や田畑を見て、農業とは見なすことができずに「horticultures（園芸）」と表現しました。当時、都市の環境が悪化しつつあったイギリスからの使節団は、全国の城下町にも感嘆した報告を行い、江戸時代に日本人がつくり上げた国土の豊かさと環境を範とした「ガーデンシティ（庭園都市）」という近代都市計画の理念がイギリスにおいて生み出されたのです。

江戸時代は、独特の産業、経済の発展があり、欧米とは異なる独自で高度な文明をもたらした変革が物静かに進行し、その成果は着実に地域社会に蓄積されていたのです。限られた資源を自然に配慮しながら有効に活用し、進んだりサイクルの体系があり、同時代の西欧社会より進んだシステムが構築されて、江戸、大阪は当時のロンドン、パリと比べてはるかに清潔で環境に配慮された循環都市でした。江戸開府から400余年経ちました。人口増加と資源の浪費にブレーキをかけ、環境と調和した成熟した生活が営まれていた江戸中後期の日本独自のシステムは意味深い。

資源の枯渇と環境問題に直面しながらも人口の増加にこだわる自治体・首長が多い今、失われた江戸の文明システムを新たな目でふり返ることが必要です。世界に類をみない成熟した江戸文明をシステムとして見直し、20世紀初頭の理念を21世紀へと再編集し、独自の地域づくりの目標を構築する視点は、重要なヒントを与えてくれます。

自然のなかに家々が点在する住み方、離散性のある小都市の持つ素晴らしさと快適さを求め“理想郷”として追い求め、自然や田園にあこがれて都市の領域を拡張してきました。その結果この半世紀の間にわが国の農耕地面積は激減し、現在でも自然に対する侵食は恐るべきスピードで進行しています。表層的な利便性や経済性を求める飾り立て文明ではなく、安心して安全な生活を維持し

てゆく“持続可能な生活観と風土観”をとおし、地域や都市をつくり維持する“生成りコンパクトシティ”や“スロータウン”への転換が必要です。

4 美しい北の国づくり／北海道vsアイルランド

イギリスやアイルランドの都市郊外や農村地帯を訪れた日本人は、美しい風景に心を奪われ、賞賛します。豊かで安定した農業の姿を実感し、建物は長い間その地の風土になじんだものがほとんどで、スローではあるが着実に安定した生活と時の流れを実感します。イギリスやアイルランドの風景が美しいのは、つくり、守ろうとする人々の強い意思に支えられているからです。

100年以上前、日本の美しさ、そして豊かな文化と風土に驚いた西欧人はこぞって自国で警鐘を鳴らし新しい国づくりへと結実させたのです。近代化や経済性を理由に、開発や自然破壊はやむを得ないという論理は的を外れているといわざるを得ません。産業革命をおこし、世界に先駆けて開発や破壊の洗礼を受けたイギリスは、自覚のもとで開発や破壊行為を国民自らの手で律し、次世代に美しい国を残しています。

モータリゼーションの発達に依存した拡大膨張型都市づくりがもたらした環境の破壊が地域の「持続可能性」（サステナビリティ）をおびやかす状況を反省し、持続可能な地域・都市への再編と再生が重要な目標となります。アイルランドに美しさを取り戻した「タイディ・タウン運動」は北海道に大きなヒントを与えてくれます。身の回りから都市、地域全体まで、都市経済、農業、環境、生命・生態、コミュニティ再生そしてランドスケープなどが相互に連携し、市民、NPO、行政そして企業の協働によって、持続的で美しい北の国が再び創り出されるのです。

profile 小林 英嗣 こばやし ひでつぐ

1971年北海道大学大学院工学研究科修士課程修了後、同大学助教授を経て、'95年教授、'97年同大学院教授。日本建築学会理事、日本都市計画学会理事、北海道都市計画審議会会長、北の道普請を育てる会会長などを兼務する臨床都市計画家。専門分野は環境都市計画・都市デザイン。都市建築設計、都市計画、コミュニティデザイン、まちづくりなど広範囲の領域で臨床学的に行動・研究活動を展開。主要な計画・プロジェクトは「北海道都市計画マスタープラン」「北海道景観形成計画」「札幌市都市計画マスタープラン」「札幌都心まちづくり計画」「札幌駅南口計画・設計」など。主な著書は「安全と再生の都市計画」「公共事業は誰のものか」「都市と建築」など。NPO日本都市計画家協会副会長。
